

第13回  
福岡アジア文化賞

THE 13th  
FUKUOKA ASIAN CULTURE PRIZES



THE FUKUOKA  
ASIAN CULTURE PRIZES

2002



---

大 賞  
GRAND PRIZE

チャン  
張

イー  
芸

モウ  
謀

ZHANG Yimou

映画監督  
1950年11月14日生  
中国

Film Director  
Born November 14, 1950  
China



## 略 歴

- 1950 陝西省西安市に生まれる
- 1957-66 西安市の小学校、中学校で学ぶ
- 1968-78 下放政策により陝西省乾県で3年間農業に従事。のちに咸陽の国营綿紡績工場で働く
- 1978-82 北京電影学院撮影科に学ぶ
- 1982 広西電影製作所に入る
- 1983 『一人と八人』で初めてカメラマンを務める
- 1987 『古井戸』東京国際映画祭最優秀男優賞  
『紅いコーリャン』で監督デビュー
- 1988 『紅いコーリャン』ベルリン国際映画祭金熊賞
- 1990 『菊豆』<sup>チュイイトウ</sup>カンヌ国際映画祭ルイス・ブニュエル賞
- 1991 『紅夢』ヴェネチア国際映画祭銀獅子賞  
『菊豆』<sup>チュイイトウ</sup>米国アカデミー賞最優秀外国語映画賞ノミネート
- 1992 『秋菊の物語』ヴェネチア国際映画祭金獅子賞  
『紅夢』米国アカデミー賞最優秀外国語映画賞ノミネート
- 1994 『活きる』カンヌ国際映画祭審査員特別賞（グランプリ）
- 1995 『上海ルージュ』カンヌ国際映画祭高等技術委員会賞  
ハワイ国際映画祭ヴィジョン・イン・フィルム賞
- 1997 フィレンツェ歌劇場でオペラ『トゥーランドット』の監督を務める
- 1998 北京紫禁城太廟でオペラ『トゥーランドット』の監督を務める
- 1999 『あの子を探して』ヴェネチア国際映画祭金獅子賞
- 2000 『初恋のきた道』ベルリン国際映画祭銀熊賞
- 2001 中国バレエ劇『紅夢』の監督を務める

## 主な作品

- 『一人と八人』[撮影] (1983)
- 『黄色い大地』[撮影] (1984)
- 『大閩兵』[撮影] (1985)
- 『古井戸』[主演、撮影] (1986)
- 『紅いコーリャン』[監督] (1987)
- 『菊豆』<sup>チュイイトウ</sup>[監督] (1990)
- 『紅夢』[監督] (1991)
- 『秋菊の物語』[監督] (1992)
- 『上海ルージュ』[監督] (1994)
- 『あの子を探して』[監督] (1998)
- 『初恋のきた道』[監督] (1999)
- 『至福のとき』[監督] (2000)
- 『(北京)オリンピック開催誘致宣伝映画』[総監督] (2001)



---

## 贈賞理由

張芸謀氏は、現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描きつづけた中国映画を代表する監督であり、世界の映画界の巨匠のひとりである。

張氏は1950年に西安に生まれた。1968年には文化大革命に巻き込まれ、10年間、農村や工場での労働に従事したのち、文化大革命終結後の1978年に再開された北京電影学院に入学し、撮影技術を学ぶ。やがて、同氏をはじめとする同学院の同期生たちの文化大革命の経験をふまえた中国映画変革の熱意が、1980年代半ばに始まる中国映画の革新の原動力となった。

張氏は、その革新の初期の作品として知られる『一人と八人』で初めてカメラマンを、また『黄色い大地』では撮影監督を務め、従来イデオロギー的な物語性が偏重されていた中国映画に力強い造形美をもたらしたことが、これらの作品の画期的な新しさであった。

1986年『古井戸』には俳優として参加して東京国際映画祭最優秀男優賞を得ており、多様な才能の一端を示した。さらに翌年には監督活動にも進出して『紅いコーリャン』を製作する。この作品がベルリン映画祭で金熊賞を得たことは、中国映画に世界的な注目を集めることになった。これは日本占領下の中国農民の抵抗を、すぐれた集団演技と色彩感覚、民話的な大胆で大らかな語り口で描いた映画である。

以後『菊豆』『紅夢』など、造形美と因習や社会に対する批判精神にあふれた作品を製作しつづける。とくに数々の国際映画祭で賞を受賞した『秋菊の物語』『あの子を探して』『初恋のきた道』の一連の作品は、文化大革命の時期から今日における中国の民衆の生き方を描いたすぐれたものである。そこには、苦しい時代にも決して希望を見失なうことなく、懸命に努力した人々が描かれている。その喜怒哀楽の感情の深さと豊かさは、見る人々の共感をさそわずにはおかない。

このように張氏は、1980年代以後今日に至る中国映画の大いなる変革と向上の推進力であり、その作品はたんに中国映画としてすぐれているというにとどまらず、世界の映画のなかでもとくに重要な存在となっており、まさに「福岡アジア文化賞一大賞」にふさわしい業績である。

---



---

学術研究賞  
ACADEMIC PRIZE

キングスレー・ムトゥムニ・デ・シルワ

Kingsley Muthumuni DE SILVA

国際民族問題研究センター所長

Executive Director, International  
Centre for Ethnic Studies

1931年12月31日生

Born December 31, 1931

スリランカ

Sri Lanka



## 略 歴

- 1931 コロンボ市に生まれる
- 1951-55 セイロン大学（現ペラデニア大学）文学士
- 1957-61 セイロン大学歴史学助講師
- 1959-61 ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院学術博士（Ph.D.）
- 1961-69 セイロン大学歴史学講師、上級講師
- 1968-69 ケンブリッジ大学スマッツ記念英連邦研究部門客員研究員および同大学クレア・ホール客員研究員
- 1969-95 セイロン大学セイロン史講座教授
- 1970-95 『セイロン史』第3巻、『スリランカ史』第2巻、編集長
- 1982- 国際民族問題研究センター（ICES）所長
- 1985-89 スリランカ、大学行政委員会副委員長
- 1986-88 国際アジア歴史学者協会会長
- 1991 ロンドン大学文学博士号（D.Litt.）
- 1991-92 ワシントンDC、ウッドロー・ウイルソン国際センター研究員

## 主な著作

- 『セイロンの社会政策とキリスト教布教諸組織 1840-1855』（王立英連邦協会，王室研究シリーズ第26巻）ロングマン・グリーン社，ロンドン，1965
- 『セイロン史』（編著）（第3巻，19世紀初頭から1948年まで）セイロン大学出版，コロンボ，1973
- 『スリランカ史』C・ハースト&カンパニー出版，ロンドンおよびカリフォルニア大学出版，バークレーおよびオックスフォード大学出版，デリー，1981
- 『多民族社会における民族間緊張を見る—スリランカ 1880—1985』アメリカ大学出版，メリーランド，1986
- 『スリランカのJ・R・ジャヤワルダナー政治的自伝』（共著）（第1巻，1906-1956）ハワイ大学出版，ホノルルおよびカルテット・ブックス，ロンドン，1988（第2巻，1956-1989）ハワイ大学出版，ホノルルおよびレオ・クーパー出版，ロンドン，1994
- 『地域権力と小国の安全保障—インドとスリランカ 1977-1990』ウッドロー・ウイルソン・センター出版，ワシントンDCおよびジョーンズ・ホプキンス大学出版，メリーランド，1995
- 『スリランカ史』（編著）（第2巻，約1500年から約1800年まで）ペラデニア大学出版，ペラデニア，1995
- 『スリランカ』（編）（大英帝国終焉関係文書シリーズ）第1部「第二次世界大戦とソウルベリ委員会 1939-1945」，第2部「独立に向けて 1945-1948」ロンドン大学英連邦研究所事務局，ロンドン，1997
- 『因果応報—スリランカの民族対立とその政治』ペンギン・ブックス，ニューデリー，1998
- 『スリランカの平和の希求—過去の失敗と将来の展望』（共編著），ICES，キャンディ，2000
- 『南アジア、バングラデシュ、インド、パキスタン、スリランカにおける対立と暴力』（編著），ICES，キャンディ，2000



---

## 贈賞理由

キングスレー・ムトゥムニ・デ・シルワ氏は、南アジアを代表する歴史学者である。西欧列強によるスリランカの植民地支配に関する実証的な研究を通じて、南アジアにおける歴史学研究に大きく貢献するとともに、現代社会におけるシンハラおよびタミル民族間の対立や自決権の問題にも取り組んでいる。

デ・シルワ氏は、セイロン大学（現ペラデニア大学）歴史学科を卒業後、同大学で教職に就いた。その後ロンドン大学に留学し、19世紀中葉のキリスト教組織による社会政策に関する精緻な研究で博士号（Ph.D.）を取得した。帰国後、南アジアの歴史学者を結集してスリランカ近代史の研究を推進し、その成果を『セイロン史』第3巻として編集、刊行した。1969年セイロン大学は、同氏の精力的な研究と教育活動を支えるために「セイロン史講座」を新設した。その教授として同氏は、歴史学研究の中心的な役割を果たすと同時に、1981年には画期的な通史である『スリランカ史』を刊行し、以後のスリランカ研究に重要な指針を与えた。1991年ロンドン大学は同氏に対して、卓越した研究業績をあげた者のみに与えられる文学博士号（D.Litt.）を授与した。

13

歴史学者としてデ・シルワ氏が最も力を入れた研究分野は、かつてスリランカを支配したポルトガル、オランダおよびイギリスの植民地行政の特質と、その分割統治政策が生みだした民族問題である。1982年同氏は、その研究活動の延長線上としてコロomboとキャンディの両市に国際民族問題研究センターを設立し、その所長に就任する。現在に至るまで学術研究の枠内にとどまらず民族対立を解決するための広範な活動に取り組んでいる。同氏の著作『因果応報—スリランカの民族対立とその政治』は、この分野における主要な成果である。さらに、歴史研究と民族問題の双方にまたがる境界領域において、自らの研究活動のみならず実践的な研究者の養成と、武力抗争の平和的な解決に努めている。

このように、南アジア、特にスリランカの実証的な近代史研究と現実的な民族問題研究において大きな業績をあげたデ・シルワ氏は、まさしく「福岡アジア文化賞—学術研究賞」にふさわしいといえる。

---

---

学術研究賞  
ACADEMIC PRIZE

アンソニー・リード

Anthony REID

シンガポール国立大学  
アジア研究所所長

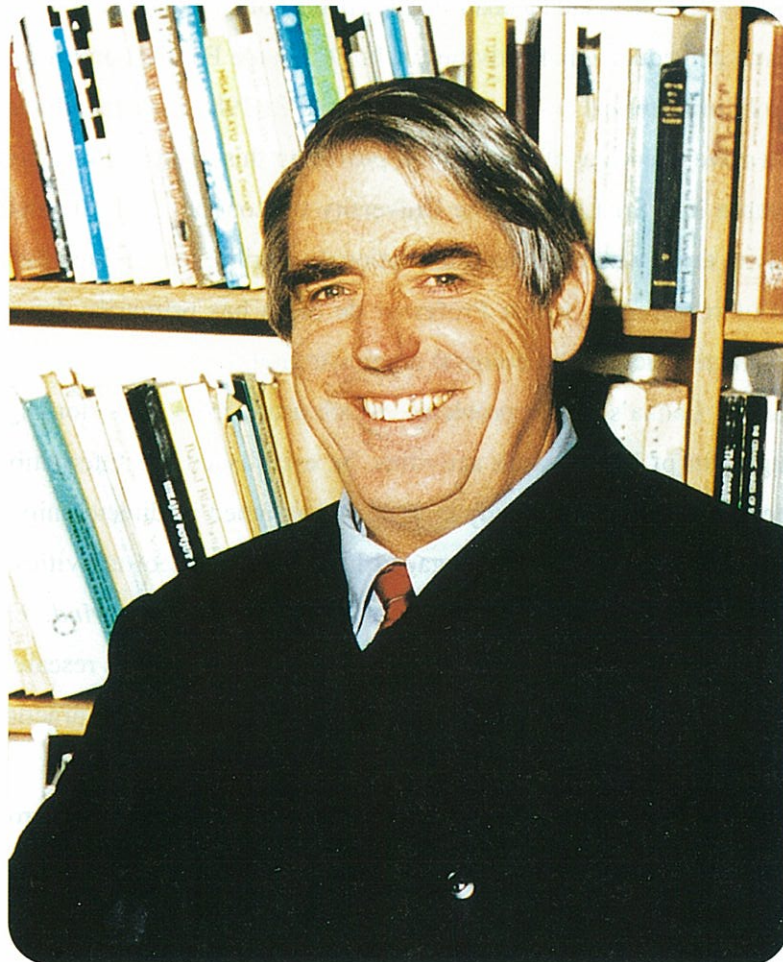
Director, Asia Research Institute of the  
National University of Singapore

1939年6月19日生

Born June 19, 1939

オーストラリア

Australia





## 略 歴

- 1939 ニュージーランド、ウェリントンに生まれる  
家族と共にアメリカ(1945-49)、インドネシア(1952)、日本(1957)に在住
- 1957-65 ウェリントン、ヴィクトリア大学にて歴史学修士号、ケンブリッジ大学にて博士号取得
- 1965-70 マラヤ大学歴史学講師
- 1970-89 オーストラリア国立大学太平洋アジア研究所、東南アジア史研究員(1974年よりシニア研究員)
- 1975-86 オーストラリア・アジア研究学会(ASAA)東南アジア出版編集委員会委員長
- 1987- オーストラリア人文科学アカデミー研究員
- 1989-99 オーストラリア国立大学太平洋アジア研究所、東南アジア史教授
- 1990-92 オーストラリア人文科学アカデミー国際担当委員
- 1996-98 オーストラリア・アジア研究学会会長
- 1997- 王立歴史学会海外名誉会員
- 1998-99 オーストラリア国立大学華人ディアスポラ研究センター創設者兼共同所長
- 1999- カリフォルニア大学ロサンゼルス校東南アジアセンター初代所長兼歴史学教授
- 2002- シンガポール国立大学アジア研究所所長

## 主な著作

- 『北スマトラにおける闘争—アチェ、オランダ、イギリス 1858-1898』オックスフォード大学出版、クアラルンプール、1969
- 『インドネシア民族革命 1945-1950』ロングマン社、ヴィクトリア、1974(再版:グリーンウッド出版、コネチカット、1986)[インドネシア語版(1996)]
- 『民衆の血—北スマトラにおける革命と伝統的支配の終焉』オックスフォード大学出版、クアラルンプール、1979[インドネシア語版(1986)]
- 『東南アジアにおける奴隷制、奴隷身分、従属』(編著)、クイーンズランド大学出版、セントルシアおよびセント・マーチン出版社、ニューヨーク、1983
- 『大航海時代の東南アジア 1450-1680 I—貿易風の下で』イエール大学出版、コネチカット・ロンドン、1988[インドネシア語版(1992)](平野秀秋・田中優子訳、法政大学出版局、東京、1997)
- 『大航海時代の東南アジア 1450-1680 II—拡張と危機』イエール大学出版、コネチカット・ロンドン、1993[インドネシア語版(1999)](平野秀秋・田中優子訳、法政大学出版局、東京、2002)
- 『寄留者たちと移住者たち—東南アジア史と中国人—ジェニファー・クシュマン教授を記念し敬意を表す』(編著)アレン&アンウィン社、シドニー、1996およびハワイ大学出版、ホノルル、2001[イタリア語版(2000)]
- 『アジア方式の自治の最後の抵抗—東南アジアと朝鮮の様々な国における近代化への回答 1750-1900』(編著)、マクミラン出版社、ハンプシャー・ロンドンおよびセント・マーチン出版社、ニューヨーク、1997
- 『東南アジア近代における生活様式』シルクウォームブックス、チエンマイ、1999

---

## 贈賞理由

アンソニー・リード氏は、東南アジア史研究においてこれまで評価されてこなかった風土や人口と民衆の日常生活の活力ある諸相、たとえば食事・結婚・儀礼・女性・娯楽などを初めて研究対象として体系的にとりあげ、新しい地域史を創りあげた東南アジア史研究を先導する歴史学者である。

リード氏は、ニュージーランドのウェリントン大学で歴史学と経済学を学び、ケンブリッジ大学で博士号を取得。その後マラヤ大学やオーストラリア国立大学など数々の大学で教鞭を執りながら、研究を推進し、後進の育成に努めてきた。

研究の出発点はインドネシア革命期（1945-1950）であったが、リード氏の国際的な名声を不動にしたのは『大航海時代の東南アジア』（Ⅰ、Ⅱ）である。同氏はフランス歴史学派（アナル学派）に刺激を受け、膨大な記録を検証して、1450年から1680年までの大規模な海上交易により生み出された東南アジア世界の共通性と独自性、さらに自然環境・宗教を含む多様性を、民衆の生活史の視点から立論し、新しい東南アジア史像を創りあげた。その地域史像の発掘と洞察力は、世界の歴史の動きと連動してきた地域としての東南アジアを浮き彫りにすると同時に、その視座は国際的に高く評価されている。

リード氏はその後、現代東南アジアの歴史研究へと手をひろげ、東南アジアの華人と20世紀前半の中央ヨーロッパにおけるユダヤ人の立場との比較検討や、インドネシアの統一と対立に注目するなど幅広い研究を続けている。

このように、東南アジア史研究において金字塔を打ち立て、活力あふれる民衆の生活基盤を多角的に捉え、民衆の生活史としての東南アジア史に新境地を拓いて、この分野における第一人者として学界を先導しているリード氏は、「福岡アジア文化賞—学術研究賞」の受賞者として真にふさわしいといえる。

---



---

芸術・文化賞  
ARTS AND CULTURE PRIZE

ラ ッ ト

本名：モハマッド・ノール・カリッド

L a t

Dato' Mohamad Nor Khalid

マンガ家

Cartoonist

1951年3月5日生

Born March 5, 1951

マレーシア

Malaysia



## 略 歴

- 1951 ペラ州のラランと呼ばれる村（カンボン）に生まれる
- 1961 カンボンからイポー市へ移る
- 1964 初のコミックブック『ティガ・スカワン（3人の友達）』が出版される
- 1964-68 雑誌及び新聞にマンガを投稿。ウトゥサン・マレーシア紙、ブリタ・ミング紙等に作品掲載
- 1968-94 『クルアルガ・シ・ママト（ママトの家族）』ブリタ・ミング紙に連載
- 1970 クアラルンプールに移る。ブリタ・ハリアン紙のレポーターとなった後、ニュー・ストレイツ・タイムズ紙の社会部へ移籍
- 1974 カートゥーン「ベルスナット（伝統的なマレーの割礼儀式）」が雑誌「アジア・マガジン」（香港）に掲載
- 1974- ニュー・ストレイツ・タイムズ紙にカートゥーン「マレーシア人の生活風景」シリーズ連載
- 1975 ニュー・ストレイツ・タイムズ社からロンドンに3ヶ月間派遣。セント・マーチン美術学校で人物画を学ぶ
- 1981 外務省の招聘で初来日。以後、広島(84)、大阪(88)、京都(89)、高知(89)等で開催された会議やプログラムに招聘される
- 1986 マレーシア国立美術館（クアラルンプール）「ラットの世界」展
- 1990 国際交流基金アセアン文化センター（現アジアセンター）主催「アセアン漫画家展」、東京  
ユネスコ・アジア文化センター主催、識字教育用ビデオ作成会議に出席
- 1993 福岡国際交流協会の招聘で訪福。「漫画にみる変わりゆくアジア」と題し対談
- 1994 ペラ州スルタンよりダトの称号を授与される
- 1996 マレーシア、アストロ・サテライト・テレビのため、作品『カンボンボーイ』をもとにテレビアニメーション（全26話）が制作される  
マレーシア・プトラ大学修士号(美術)取得
- 1998 アイゼンハワー交流フェローシップ・プログラム（米国）に参加  
クアラルンプールからイポー市へ移る
- 1999 テレビアニメーション・シリーズ『カンボンボーイ』アヌシー国際アニメーション・フェスティバルにて最優秀テレビシリーズ賞を受賞

## 主な作品

『カンボンボーイ』1979（邦訳：『カンボンのガキ大将』晶文社、東京、1984）

『タウンボーイ』1980（邦訳：『タウンボーイ』1996）

『カンボンボーイ〜イエスタディ・アンド・トゥデイ』1993（邦訳：『カンボンボーイ 昨日・今日』1998）

[出版地の記載がないものは、ブリタ出版社、クアラルンプールにて出版]

\* 途上国の識字、経済、環境意識向上を目的とし、ユネスコ・アジア文化センターが作成したビデオアニメーション3部作の主人公キャラクター「ミナ」をデザインした。(1990)

\* 1974年から現在まで、ニュー・ストレイツ・タイムズ紙に連載されているエディトリアル・カートゥーンは、これまでに20冊を超えるコミックブックとして出版されている。



---

## 贈賞理由

ラット氏（本名モハマッド・ノール・カリッド）は、マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現した作品で人々の共感を得て、社会に大きな影響力を持つ、アジアを代表するマンガ家である。

ペンネームの「ラット」は、小さい時のニックネーム「Bulat」（マレー語で丸いの意）からきたものである。少年時代からマンガを描き、13歳で初めて作品が出版された。後にマレーシア最大の英字紙ニュー・ストレイツ・タイムズに入り、マンガの才能を買われ、同社において1974年にマレーシアで初めて新聞の専属マンガ家となった。現在まで28年にわたり、同紙にカートゥーン（ひとコマの時事諷刺マンガ）を連載している。同氏は経済成長と都市化の裏側で起こる自然環境の破壊、伝統的村落の崩壊、利権に狂奔する政治、外資企業の進出による急激な社会変容などに焦点をあてた作品を発表してきた。アジア地域できわめて強い影響力をもつコミュニケーションの方法であるマンガにより、社会の多くの階層にわたって爆発的な共感を得るとともに、東南アジアのマンガ家に多大な影響を与え、リーダー的役割も果たしてきた。

25

代表作『カンポンボーイ』は、自伝的な長編マンガで、村（カンポン）に生まれた少年が、家族やカンポンの人々の愛情に包まれて成長していく様子をマレーシアの伝統文化を織り交ぜながら描いたものであり、テレビアニメ化されて欧米でも紹介された。さらに少年の成長を描いた『タウンボーイ』などの作品では、多民族社会の複雑な風土や都市化の波に洗われる社会の実態がユーモアの中に表され、マレーシア、ひいてはアジアに共通の精神的な風土を世界に伝えるものとなっている。

ラット氏の作品に込められた、社会を見つめる鋭い、しかし温かなまなざしは、伝統文化と精神的な風土を包み込み、アジアの発展を考える上で多くの示唆を与えている。まさしく「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」にふさわしい業績である。

---

## 授 賞 式

日時：9月19日（木）午後2時～4時

会場：アクロス福岡シンフォニーホール

会場ロビーにおいて福岡西陵高等学校管弦楽部による演奏で出迎えられるなか、受賞国大使館関係者をはじめ、留学生、国際交流団体、経済団体、大学、地域団体の代表者及び市民など約1,200人の参加を得て行われた。

式典では、映像での受賞者紹介や主催者による賞の贈呈のほか、来賓の西村六善外務省特命全権大使及び麻生渡福岡県知事の祝辞が述べられ、受賞者の業績をたたえた。その後、4人の受賞者がそれぞれ受賞の喜びを表し、市民に対するメッセージなどを語った。

また、特別演奏として、チェン・ミン氏による二胡の演奏が行われ式典に花を添えた。



29



西村六善外務省特命全権大使による来賓祝辞  
H. E. Mr. Nishimura Mutsuyoshi, Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary delivering a congratulatory address



麻生渡福岡県知事による来賓祝辞  
Mr. Aso Wataru, Governor of Fukuoka Prefecture delivering a congratulatory address



## 受賞者あいさつ



張 芸 謀

皆様、こんにちは。

福岡を訪れ、福岡アジア文化賞大賞を受賞する機会を得ることができましたことを、大変うれしく思います。また、このような栄えある賞をいただき、誠に光栄に思っております。

これまで、福岡アジア文化賞の中国人受賞者として巴金氏、費孝通氏及び王仲殊氏がおられますが、いずれも非常に優れた私が見習うべき方々です。彼らに比べれば私はまだまだ未熟です。

今回の福岡アジア文化賞の受賞は私にとって一つの励まし、一つの新しいスタートであると思っております。

一人の映画監督として、私は自分の仕事に強い愛情を持っております。この仕事自体が人と人、国と国の文化の交流を促し、通いあわせるものです。私の願いは、よい映画を撮り、それを通じて世界の人々に中国を理解してもらい、さらには中国の映画を世界文化に、とけ込ませることです。

福岡アジア文化賞は、私たちに互いに文化を交流し、学びあう機会を与えるものであり、世界各国の文化の融合を促すものです。

この盛大な式を通じて、中国と西側の文化が一層とけあうことができますことを、そして、福岡アジア文化賞が回を重ねるごとに、充実したものとなっていきますよう願っております。

最後に、今回の受賞に改めて感謝申し上げ、長年、私に寄せてくださいました御支持に対しても感謝の意を表したいと思います。

今後とも多くの優れた作品をつくり、皆様にお見せできるよう頑張りたいと思います。

ありがとうございました。



キングスレー・  
ムトゥムニ・デ・シルワ

まず、このたび私にこの賞を与えてくださった福岡アジア文化賞委員会に心より御礼申し上げます。大変栄誉なことでもうれしく思います。そしてアジアの学術世界での最高峰である歴代の福岡アジア文化賞受賞者を目にしたとき、この喜びはことさら大きなものを感じられてなりません。私はスリランカから初めての受賞者となります。同時に南アジアからこの賞をいただく2人目の歴史学者であることにも気がつきました。

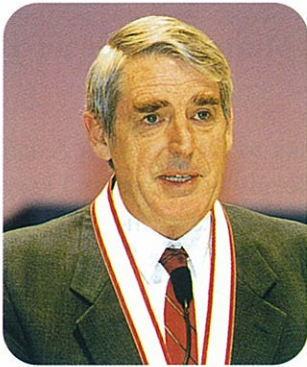
スリランカ人である私は、長く、そして素晴らしい歴史を有する一方で、混乱の歴史も抱える国に住む一市民です。近年、スリランカは対立の絶えない国として、しばしば話題にのぼります。特にこの70年あまりは、対立問題ばかりが注目され、スリランカの誇る歴史や業績の優れた点に目が向けられてきませんでした。しかし、対立を抱えながらも、スリランカはアジアでも非常に安定した民主主義国家の一つであり続けています。国民は1931年の総選挙を皮切りに、今日まで選挙権を持ち、政治形態も独立以来、2政党制を堅持してきました。このような歴史を有する国は、アジアの中でもそれほど多くはありません。社会福祉国家という点でも、南アジアの中で独自の立場を保っています。

私は大学教授として、生涯をかけて自国の歴史を研究し、それを書物に表してきました。これまでの人生すべてを、自国の歴史を振り返り、それを教えることに費やしてきました。建国の頃から現代までの国の歴史を書くというのは、非常に中味の濃い、そしてやりがいのある体験でした。今日の、そして過去数世紀におけるスリランカの諸問題を書き記すことは、大したことではないかも知れません。しかし、スリランカを学ぶ中で南アジアと東南アジアの歴史のエッセンスを学ぶことができるということを認識するならば、そこには、スリランカという島国を越えて広がる視点を得ることができます。スリランカの歴史を書くということは、特に過去5世紀にわたりスリランカの各地域、もしくは全土に及んだ植民地支配の中で、政治、経済、文化に多大な力を及ぼした歴史の役割について書くことに他なりません。同時に、この小さな島国の文化が、共に仏教という面で強いつながりをもつ東南アジア、ひいてはより広い地域に及ぼした影響について書くことにもなるのです。この文化は日本とスリランカを結ぶものでもあります。

民族対立というスリランカの問題を考えた私は、何人かの同僚と国際民族問題研究センターを設立しました。ここで、スリランカだけでなく、世界が抱える民族問題を研究しようとしたのです。今年で20年を迎えますが、お陰で我々の業績が、広く国際的な評価を受けるまでに成長しました。私の人生の中で、最もやりがいを覚えた仕事の一つであったと思っています。

最後に、一人の歴史学者として、そして民族対立や民族問題の研究者としての私の業績を評価し、このような栄誉を与えていただいた福岡アジア文化賞委員会に対し、あらためて心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。





アンソニー・リード

アジア研究者にとって、このような栄えある席で福岡アジア文化賞をいただくのは、まことに光栄なことです。

アジアは、多様な伝統文化・現代文化がちりばめられた世界の宝庫です。息絶えようとする、もしくは滅んだも同然の文化もある一方で、脈々と根をはり、ダイナミックに変化をとげる文化もあります。福岡アジア文化賞がその13年の歴史の中で顕賞することができたのは、このような多様な文化的伝統、芸術様式そしてラット氏のマンガ張氏の映画のような新しい表現のうちのごく一部でしかありません。

それゆえ私のような、アジアの芸術や学術を生まれもって身に付けず、外側から観察をしてきた研究者たちにも賞を授与してくださる福岡アジア文化賞委員会はまことに寛大な心をお持ちです。これまで、ほぼ2年ごとに、私を含めアメリカ人4人、オーストラリア人2人、イギリス人1人、アイルランド人1人がこの賞をいただきました。私たちは皆、1つもしくは複数の分野でアジアの文化や社会を研究し、その成果を俗に言うアジア人ではない読者や学生のために英語で執筆し、教壇に立っています。私たちはアジアの文化を文字にし、解説することはできますが、張芸謀氏やラット氏のように、映画やマンガの形に作ることはできません。それゆえ、よそものの物書きに対してもこのような評価をいただけることは殊のほかありがたく、光栄なのです。

私が今「俗に言う」といったのは、この「アジア人」という言葉自体がすでに時代遅れだと感じたからです。英語はアジアでもっとも広く、そして創造的に使われている言語の一つになっています。アジアの人々は古くから、世界の中でそれぞれ独自の社会に属すると考えてきましたが、今では地球村の市民という要素が濃くなり、アジア人、オーストラリア人、日本人などの区別が難しくなっています。最近福岡アジア文化賞を受賞した「アジア人でない受賞者」ベネディクト・アンダーソン氏はアイルランド人ですが、中国で生まれ、インドネシアとタイで暮らし、研究を行い、アメリカで教壇に立ちました。スタンレー・ジェヤラジャ・タンバイア氏の場合は、スリランカで生まれ育ち、研究は東南アジア、そしてアメリカで教えています。王廣武氏や私は、2人とも胸を張って自分たちはオーストラリア人だと言います。でも、生まれたのは別の場所です。王氏はインドネシア、私はニュージーランドです。王氏がマレーシアやオーストラリアや香港で教えたのに対し、私は、マレーシア、オーストラリア、アメリカで生徒の前に立ちました。そして2人とも今は偶然にもシンガポールで働いています。私はこのように国境が自由自在に交差し、移動する時代に生まれ、文化がこのように変化に富み、混在する場所に身を置くことがうれしくてたまりません。

福岡アジア文化賞は、他に例を見ないほど寛容で創造性に富んだ歩みをされています。私は、若い時に自分の人生でもっとも強烈な学習体験の場の一つとなった日本で賞をいただけることを、特にうれしく思います。18歳の学生だった頃、兄と一緒に、ニュージーランドから日本の鉄くず運搬船で初めて日本を訪ねましたが、この3週間の船旅で、言葉の大切さと、理解力や文化の壁をこえてつくられた人間の絆がいかに強いものかを学びました。以来、何度となく日本を訪れ、今も日本の友人から生活や文化について学びつづけています。

このすばらしい賞を創り出された福岡の皆様にご心からの賛辞を送り、そしてここに妻ともども参加させていただいたことを深く感謝いたします。言葉にできないほど光栄で誇りに思います。





ラ ッ ト

マンガ家は絵が描けるユーモア作家です。絵というより、たいていの場合、落書きがうまいというほうがあっているでしょう。マンガ家は、自分で描いたマンガを部屋でこっそり見ながら笑うコメディアンです。テレビや舞台、ラジオには登場しません。油絵ももちろん描けますが、それよりも人の特徴を観察したがる一風変わった癖があるため、観察したものを描き、そこから笑いを引き出す芸術家なのです。自分の感情を絵で表現します。それぞれ得意分野があり、政治マンガとか時事マンガ、社会批評、諷刺マンガ、連載マンガ、テレビアニメやアニメ映画といった具合です。

私はマレーシアのニュー・ストレイツ・タイムズという新聞の専属マンガ家として、これまで28年間、マンガを描いてきました。自宅が仕事場です。自分の部屋で一人でマンガを描きます。必要なのは、紙と鉛筆、マジックペン、筆、インク、そして私の作品を見てくれる山のような読者です。読者はもちろん、社会の代弁者である一般の人々、一般の読者です。マンガで取り上げるのは、「現代の社会、現代の世界についていくのはとても難しい！」ということです。現代の出来事、毎日の生活、家庭、隣近所、地域、政府、経済などとうまくやっいてこうとすることで、マンガ家の多くが、無声の白黒コメディ映画の中でチャーリー・チャップリンが演じていた放浪者になった気分を味わっているのだと信じています。人々の様々な思いや意見はマンガを通して声となり、マンガ家と読者をつなぐ絆を形成していくのです。

マレーシアの小さな村に生まれた私は、12歳からマンガを描き始めました。このスケッチという趣味に私は夢中になりました。描きあがったマンガを鼻高々に家族や友達に見せたものです。13歳になる頃には、自分の描いた子どもじみたマンガが、流行りの映画雑誌やマンガ雑誌に載るようになりました。雑誌に載ったマンガにお金は払ってもらえませんでした。出版社から映画の無料券がもらえました。私はそれがうれしくて、そういう自分が誇らしかったのです。それもこれもマンガが好きで、家族や近所の子どものびっくりさせたいという私の気持ちの表れだったのですが、その時にはまだ、自分がプロのマンガ家として年老いるまで落書きを続けることや、自分のマンガや自分が地球のはるか遠くまで旅をして国際社会とうれしい接触をすること、そして世界中に大勢の友人ができることなどは考えていませんでした。

というわけで、今もマンガを描きつづけています。今はフリーのマンガ家として独立独歩、自分がボスという自由を満喫しています。自分の好きなように描きます。しかし、実際はどれほどの自由があり、またその自由を必要としているのでしょうか。確かに、28年間マンガを描いてきて、「何を描いてはいけないか」ということはわかります。なぜなら、私たちマンガ家が目指すのは、お互いをもっとよく理解できるように、みんなに共通する前向きの事柄を取り上げ、お互い友情をもって手を携えることであり、決して誰も非難しないということです。いろいろな民族の宗教、慣習、伝統などの話題は個人的なものですから触れる必要はありません。

福岡アジア文化賞芸術・文化賞は、福岡市が、マンガ芸術を今日の世界をもっとも効果的に結ぶコミュニケーションの一つであり、国際理解を促進する特別な方法であると認めてくださった証だと思えます。本当にこの賞を受賞できたことは大きな光栄です。

ありがとうございました。



## 受賞者フォーラム

日 時：9月21日（土）午後1時30分～3時30分

会 場：アクロス福岡イベントホール

参加者：約300人

1 テーマ 「Asia, My Global Community－アジア、地球社会－」

2 出演者 大賞受賞者 張 芸 謀  
学術研究賞受賞者 キングスレー・ムトゥムニ・デ・シルワ  
学術研究賞受賞者 アンソニー・リード  
芸術・文化賞受賞者 ラット  
コーディネーター（中部大学国際関係学部教授） 小倉 貞男

### 3 概 要

4人の受賞者が一堂に会し、子ども時代の思い出から今後の展望までを語った。ラット氏は生まれ育った村の様子やプロのマンガ家になった経緯などを紹介するなかで、年長者に対する敬意や自然環境の問題を若者たちに伝えたいことを強調した。外交官の家庭に生まれ育ったリード氏は、世界各国での生活が人生に大きな影響を与えたと語り、近代化の過程にあるアジアにはエネルギーやダイナミズムがあると力説した。スリランカで普通選挙権に基づく初めての総選挙が行われた年に生まれたというデ・シルワ氏は、少年時代に経験した環境の変化や、経済学が奨励されるなかにあって自分の意思を貫いて歴史の勉強を続けたことなどを語った。張氏は、苦しい時期も含めて過去の経験が一生の財産になったと語るとともに、世界各地においてそれぞれの民族の映画を守り発展させていくことの重要性を訴えた。

最後に小倉氏が、21世紀は世界中の人々が手を携えて交流し、他人の痛みや悲しみがわかるコミュニティを築いていかなければならないと述べ、5人の固い握手でフォーラムは終了した。



## アジア映画セミナー

日 時：9月20日（金）午後6時～8時

会 場：アクロス福岡イベントホール

参加者：約600人

1 テーマ 「張芸謀が描く民衆の<sup>いのち</sup>生命と希望」

2 プログラム

趣旨説明	映画評論家	佐藤 忠男
トーク	福岡アジア文化賞大賞受賞者 コーディネーター	張 芸 謀 佐藤 忠男

3 概 要

張氏とは長年の知り合いである佐藤氏のリードで、トークは和やかに進められた。張氏は北京電影学院での入学や卒業をめぐるエピソード、文化大革命終結後の学生たちの映画に対する情熱、意に反して地方の映画製作所に配属されたときの思い、役者を演じたときの心境などを切々と語った。

47 作品については、「人と違うものを撮ってやろう」という思いが、撮影を担当した初期作品の独創的なカメラワークに潜んでいることや、初の監督作品『紅いコーリャン』に込められた自分自身の叫びなどを自ら告白。常に新しいスタイルで映画を製作し続けているとの評価に対しては、「新しいことへの挑戦が新鮮な生命力を与えてくれる」と、映画製作に対する自分自身の姿勢を語った。また、最新作の『英雄』について「初のアクション映画で、今までにない自信作である」と紹介すると、会場からは期待を込めた大きな拍手が起こった。

最後に、初めて訪れた福岡に好感を持ったことや、福岡市民へアジアに目を向けた意義深い福岡アジア文化賞を誇りにしてほしいとメッセージを送り、セミナーの幕を閉じた。





## 南アジア歴史セミナー

日 時：9月22日（日）午後0時30分～3時

会 場：アクロス福岡イベントホール

参加者：約100人

### 1 テーマ 「スリランカ、停戦から恒久的な和平へ」

### 2 プログラム

趣旨説明	龍谷大学社会科学研究所教授	中村 尚司
基調講演	福岡アジア文化賞学術研究賞受賞者	キングスレー・ムトゥムニ・デ・シルワ
講 演	関東学園大学法学部教授	今川 幸雄
パネルディスカッション		
	パネリスト	キングスレー・ムトゥムニ・デ・シルワ 今川 幸雄
	コーディネーター	中村 尚司

### 3 概 要

スリランカ政府とタミル・イーラム解放の虎（LTTE）の間で、1回目の事前和平交渉が行われたのと時を同じくして開かれたこのフォーラム。基調講演においてデ・シルワ氏は、スリランカで二十余年にわたって続いている民族抗争の経緯と、決裂に終わった過去2度の和平交渉の内容を説明し、停戦を持続可能な和平に移行させるには何が重要かを説いた。続いて今川氏が、スリランカと共通点の多いカンボジアにおける紛争と和平について講演し、紛争の特色、和平への過程と成功に至った理由などを紹介した。

パネルディスカッションでは、デ・シルワ氏がカンボジアとスリランカの紛争の共通点と相違点を分析した。また、スリランカの和平に対して外国人の果たす役割、私たち日本人に何ができるのかについても議論された。

最後に中村氏が、今回のフォーラムをスリランカの問題を考える出発点であると位置づけ、締めくくりの言葉とした。



キングスレー・ムトゥムニ・デ・シルワ氏  
Professor Kingsley Muthumuni de Silva

## 東南アジア再発見歴史セミナー

日 時：9月20日（金）午後2時～4時30分

会 場：アクロス福岡イベントホール

参加者：約100人

1 テーマ 「交易の時代」の人々～食事・結婚・遊びから～

### 2 プログラム

趣旨説明	上智大学アジア文化研究所教授	石澤 良昭
基調講演	福岡アジア文化賞学術研究賞受賞者	アンソニー・リード
パネルディスカッション		
パネリスト		アンソニー・リード
	神田外語大学学長	石井 米雄
	京都大学東南アジア研究センター教授	濱下 武志
	コーディネーター	石澤 良昭

### 3 概 要

51 リード氏は基調講演において、「交易の時代」の東南アジアにおける文化・宗教や、その後、交易の衰退とともに変化していくさまを、グローバルゼーションとローカリゼーションの相互作用が働いたと読みとれるリズムがあったと説いた。さらに自身の著書に対する批判をも紹介し、それに答えるなかで持論をいっそう深めていった。

パネルディスカッションでは、まず石井氏が「交易の時代」の第二期に関して「東南アジアとスリランカの関係」と「タイにおける宗教の合理化」の問題を提起。続いて濱下氏が「南シナ海を中心とする貿易」と「イスラムを例にした宗教の伝播」を取り上げた。それを受けてリード氏は、「交易の時代」にはさまざまな世界間の相互作用が存在したことを強調した。さらに議論は、共通の言語や契約書の有無といった交易の具体論や、結婚や葬儀の事例などへと展開した。

最後に石澤氏が、リード氏の主著である『大航海時代の東南アジア』第1、2巻が、東南アジア史にとって大きな意味を持つものであると高く評価し、第3巻出版への期待を述べてフォーラムを締めくくった。



アンソニー・リード氏  
Professor Anthony Reid



## マンガで見るアジア

日 時：9月22日（日）午後3時30分～5時30分

会 場：イムズホール

参加者：約150人

### 1 テーマ 「ラットさんのアジア今昔物語」

### 2 プログラム

趣旨説明	福岡アジア美術館館長	安永 幸一
講 演	マンガ家	サトウ サンペイ
基調講演	福岡アジア文化賞芸術・文化賞受賞者	ラット
ト ー ク		
出 演 者		ラット サトウ サンペイ
コーディネーター		安永 幸一

### 3 概 要

53

まずサトウサンペイ氏が「ラット氏との出会い」について講演し、1990年にラット氏が主導した世界のマンガ家が集うイベントでマレーシアに招待されたときの驚きと感動や、ラット氏の人柄などを紹介した。

ラット氏の基調講演では、作品を映像で追いながら、13歳でマンガを描き始めたころの状況や、プロのマンガ家になった経緯、初めて日本を訪れたときの印象などが語られ、そのユーモアにあふれた語り口に、会場から笑いが起きる場面も見られた。氏は、代表的長編作品『カンボンボーイ』シリーズについて「自分たちの歴史や伝統・習慣などを若者に伝えたかった」、「人を落ち込ませるのではなく、笑いを生み出したい」と、マンガに対する思いを語った。

続いて安永氏の進行で、サトウ氏とプロのマンガ家になったきっかけや連載を続けていく上での苦労話など、次々と興味深い話題が繰り広げられた。最後に一枚の紙にそれぞれの人気キャラクターを描いて見せると、会場からは大きな拍手が湧き起こった。

終了後も、サインや握手を求める人々と気さくに言葉を交わすラット氏の姿が見られた。



ラット氏  
Mr. Lat



サトウサンペイ氏  
Mr. Sato Sampei



安永 幸一氏  
Mr. Yasunaga Koichi



## 学校訪問：SCHOOL VISITS

### 博多工業高等学校

日 時：9月18日(水)

午前10時～午後0時30分

訪問者：学術研究賞受賞者

アンソニー・リード

生徒：1～3年生 約800人

### Hakata Technical High School

Date: Wednesday, September 18, 2002

Time: 10:00 a.m. - 0:30 p.m.

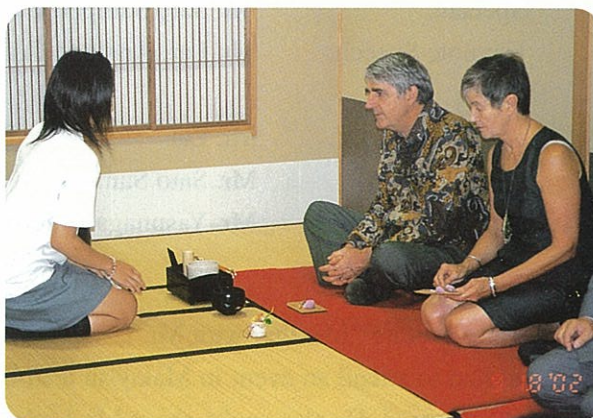
Visitor: Professor Anthony Reid, Academic Prize Laureate

Students: Approx. 800 first - to third-grade students



55

生徒からの質問を受けるリード氏  
Professor Reid answering the questions of students



茶道部の生徒からお茶の接待を受けるリード夫妻  
Professor and Mrs. Reid participating in a tea-reception with students from the tea ceremony club

### 福岡西陵高等学校

日 時：9月18日(水)

午前11時～午後0時30分

訪問者：学術研究賞受賞者

キングスレー・ムトゥムニ・デ・シルワ

生徒：1、2年生 約800人

### Fukuoka Seiry High School

Date: Wednesday, September 18, 2002

Time: 11:00 a.m. - 0:30 p.m.

Visitor: Professor Kingsley Muthumuni de Silva, Academic Prize Laureate

Students: Approx. 800 first- and second-grade students



生徒たちに熱心に語りかけるデ・シルワ氏  
Professor de Silva passionately talking to the students



生徒たちからお礼の花束をうけるデ・シルワ夫妻  
Professor and Mrs. de Silva receiving bouquets from the students



### 金武中学校

日 時：9月18日(水)

午後1時30分～3時10分

訪問者：芸術・文化賞受賞者 ラット

生 徒：1年生 約230人



『カンボンボーイ昨日・今日』のスライドを見せ講演するラット氏  
Mr. Lat lecturing on *Kampung Boy: Yesterday and Today* with slides

### Kanatake Junior High School

Date: Wednesday, September 18, 2002

Time: 1:20 - 3:10 p.m.

Visitor: Mr. Lat, Arts and Culture Prize Laureate

Students: Approx. 230 first-grade students



熱心に聞き入る生徒たち  
The students listening attentively

### 東光中学校

日 時：9月20日(金)

午後1時～4時

会 場：大博多ホール

訪問者：大賞受賞者 張芸謀

生 徒：1～3年生 約250人



『あの子を探して』の鑑賞後、張氏の話聞く生徒  
The students listening to Mr. Zhang after viewing the film *Not One Less*

### Toko Junior High School

Date: Friday, September 20, 2002

Time: 1:00 - 4:00 p.m.

Venue: Hakata Grand Hall

Visitor: Mr. Zhang Yimou, Grand Prize Laureate

Students: Approx. 250 first- to third-grade students



生徒からの質問に答える張氏  
Mr. Zhang answering the student's questions